

外国にルーツを持つ子どもへの支援をふり返る

—多言語多文化共生社会の構築に向けて—

半原 芳子, マグラブナン・ポーリン

要 旨

本稿は多言語多文化共生社会の構築に向け、筆者らが取り組んでいる外国にルーツを持つ子どもへの支援をふり返り報告するものである。具体的には、筆者らが行っている福井市K中学校での放課後教室において、最も長く支援を行ったCちゃんの成長（2014年10月～2016年3月）のプロセスを辿った。そこから放課後教室の特徴を見出すとともに、今後その教室をコミュニティとして発展させていくための展望を得た。

キーワード：ふり返り、実践プロセスの記述、コミュニティのデザイン

1. はじめに

1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正および翌年の施行以降、日本では外国籍住民が増加の傾向にあり、近年では母国の経済不況や政情への不安から滞在の長期化・定住化が進んでいる。日本の学校に学ぶ外国にルーツを持つ子ども達¹⁾が増えているのはこうした状況と軌を一にしており、彼らの背景はかつてないほど多様化かつ複雑化している。

本稿は、筆者らが取り組む外国にルーツを持つ子どもへの学習支援のプロセスを記述し報告するものである。上述したように、近年子ども達の背景や状況は複雑さを増している。そうしたなか彼らの支援に関わっている者達は、筆者らがそうであるように日々試行錯誤しながら実践に取り組んでいる。その時の最良だと思ふ判断に基づき行動し、それらが積み重なり実践が継続され展開しているのだが、そのプロセスが支援者（実践者）本人によって記録されたり捉え返されたりすることはほとんどない。日々の忙しさに追われ、目の前の子どもへの対応に必死であるため、それはある意味仕方がないことかもしれない。しかし、実践を記録し報告することは実践者自身の力量形成において、そして多言語多文化共生社会の構築に向け非常に重要だと考える。なぜなら、自分の実践をふり返ることでその実践がどういう意義を持つのかを改めて考えたり、ふり返るなかで実践が思わず展開していることに気づいたり、またそこから今後の展望を探り当てたりすることができるからである。さらに、書いたもの（記録）は話し言葉と違い文字として残る。それは同じ志を持ち実践している誰か、さらには未来の実践者達と、たとえ状況は異なっても空間や時間を超え共有できる知恵となる。多言語多文化共生社会はすでにそこに「ある」ものではなく、我々の日々の地道な試行錯誤とその事例の検討により可能性が拓かれるものだと考える。その意味において、実践を記録し報告することは多言語多文化共生社会の構築に向けた礎となる。

以上の問題関心に基づき、本稿では筆者らが現在福井市内で取り組みを進めている外国にルー

ツを持つ子どもへの学習支援をふり返り、報告する。福井市には2014年9月時点で小学校に78名、中学校に40名の外国籍の児童・生徒が在籍するⁱⁱ⁾。ここでは、福井市K中学校（以下、「K中学校」と記述する）のCちゃんの成長のプロセスを辿る。Cちゃんはフィリピン人の母親と日本人の父親を持つ女子生徒で、筆者らは2014年10月から2016年3月までの1年半に渡りCちゃんへの支援を継続して行った。Cちゃんに注目した理由は、筆者ら二人が最も長く支援を行った生徒であるからである。Cちゃんの成長プロセスを辿ることはすなわち筆者らのこれまでの実践をふり返ることであり、今後に向けた重要な示唆が得られると考えた。なお、本稿の根拠とする資料は、筆者ら支援者の記録とふり返り、CちゃんがSNS等で発信している情報、CちゃんへのインタビューおよびCちゃんの母親へのインタビューの記録であるⁱⁱⁱ⁾。

2. Cちゃんの成長の跡づけ

2-1. おしゃべりから始まった支援（2014年10月～2015年3月）

Cちゃんは出会った2014年10月当時、中学2年生になる女子生徒であった。ここでCちゃんについて少し述べておく。Cちゃんは母親がフィリピン人、父親が日本人で、一才年上の兄がいる。Cちゃんが14歳になるまで両親は日本、Cちゃんと兄はフィリピンとで離れて暮らしていた。Cちゃん兄弟は母方のフィリピンの祖母によって育てられた。2013年3月、父親が病気で倒れたことを機にCちゃん兄弟は来日し、以後広島にて家族4人で暮らす。父親の死去後の2014年7月、母・兄・Cちゃんとで福井にやってくるが、福井に移った直後母親が病気となる。フィリピンでのCちゃんは活動的で明るく、友達やいとこから姉のように慕われていた。ギターを弾くのが好きで、よく歌い、バスケットボールも得意だった。しかし、日本に来て以降親しい友人はおらず、日本語も難しく、ストレスから元気がなくなっていった。母親ともよく衝突し、定期的に精神科医にも通うようになった。そして、次第に学校に行くことを難しくと感じ始めるようになっていった。筆者らがCちゃんに出会ったのはそういう時期であった。

筆者らはCちゃんに初めて会った日のことを今でもよく覚えている。その数ヶ月前から福井大学の日本人学生と留学生（ポーリンはその一人である。フィリピン出身の数学教師で当時は福井大学の研究生であった）、教員（半原）とでチームを組み、K中学校に在籍する外国にルーツを持つ子ども達への支援を始めていた。それは週に1回放課後90分ほど学校の相談室や会議室を借り、子ども達の母語と日本語で教科の学習サポートを行うというものである（以下、K中学校でのこの支援のことを放課後に行っていることから「放課後教室」と記述する）。当時放課後教室には中学3年生で韓国出身のN君、同じく中学3年生でフィリピン出身のT君、Cちゃんの兄のK君が来ていた。筆者らはそこに新たにCちゃんが加わると聞き、中学2年生の国語の教材をフィリピン語と日本語で準備した。それは、特に筆者（半原）がCちゃんに母語と日本語の両方の力を伸ばし、学校の勉強がおもしろいと思うようになってほしいと願ってのものだった。しかし、Cちゃんへの支援初日、Cちゃんは筆者（半原）の提案を激しく拒んだ。そして、自分がこの放課後教室に来た理由は日本語で日本人と上手におしゃべりできるようになるためだと訴えた。そのCちゃんの求めに、当時学部2年生で日本人学生のEさんが快く応じてくれた。以来Cちゃん

は放課後教室でEさんとおしゃべりを楽しむようになった。

右の写真(図1)は当時の放課後教室の一部を写したものである^{iv)}。中央にいる3人は、中学3年生で韓国出身のN君(左)、学部3年生で韓国人留学生のPさん(右)、学部3年生で日本人学生のTさん(手前)である。3人は中学3年の国語の学習に取り組んでいる。その横でCちゃんとEさんがソファーに腰掛け窓の外を見て談笑している。窓からは向かいの建物



図1 放課後教室の様子(2014年11月撮影)

にあるCちゃんの教室が見える。そこにはCちゃんの同級生がまだ数名残っており、CちゃんはEさんにその同級生のことを話している。窓に描かれているトナカイとサンタクロースの絵はCちゃんが描いたものである。CちゃんはEさんとのおしゃべりのなかで、絵を描くのが好きなこと、歌が得意なこと、フィリピンにいる祖母やいとこととても仲が良いこと、お母さんの体の調子がすぐれないこと、高校に進学するつもりはなく早く働いてお金を稼ぎたいことなどいろいろなことを話していた。

Cちゃんは放課後教室でEさんとおしゃべりをする傍ら、中学3年生のT君と兄のK君によくちょっかいを出した。二人は県内の定時制高校を受験するため、筆者(ポーリン)と数学の勉強に励んでいた。そして、年が明けた1月以降は、受験科目に面接試験があるためその練習に集中して取り組んだ。Cちゃんは二人のそうした真剣な様子をフィリピン語でからかったり、「なんで高校に行くの?」と怪訝そうに疑問を投げたりしていた。T君とK君はそうしたCちゃんの態度に怒ることなく優しく接していた。

教室にはCちゃんの担任の先生がよく顔を出してくれた。宿題の確認や連絡などほんの数分であったが、「ここに来るとCちゃんとよく話せるから」とほぼ毎回訪ねて来てくれた。放課後教室では賑やかでひょうきんで主張をはっきり伝えるCちゃんであったが、教室では非常におとなしいということだった。教頭先生や学年主任の先生もよく様子を見に来てくれた。Cちゃんは先生達が放課後教室に来てくれるのを喜んでいる様子だった。

中学3年生のN君、T君、兄のK君は全員志望校に合格した。そして、高校合格と同時に放課後教室を卒業した。放課後教室はCちゃん一人になったが、3人と入れ替わるように年度末に中学1年生でフィリピン出身のKO君が来るようになった。

2-2. 中学3年生になり教科学習に取り組むようになる(2015年4月~2016年2月)

新年度となりCちゃんは中学3年生になった。放課後教室には昨年度末から来るようになったフィリピン出身のKO君が中学2年生になり、中学1年生で日系ブラジル人のAちゃんとHちゃんが新たに加わった。KO君は小学5年生の時に来日しており、また、AちゃんとHちゃんは日本生まれ日本育ちのため日本語での日常会話は問題なかった。しかし、3人とも教科学習には

困難を感じているとのことだった。支援者側にも新たなメンバーが加わった。これまで支援メンバーは留学生（ポーリンは福井大学教職大学院の大学院生となった）と、日本人は教育地域科学部の学部学生が主であったが、工学研究科博士後期課程の日本人学生Yさんが加わったことで年齢も専門も多様となった。中学3年生となったCちゃんは昨年度までとは随分違っていた。以前は教室で戯けていたCちゃんが、年下のKO君が教室で騒ぐとフィリピン語で注意したり、日系ブラジル人のAちゃんとHちゃんが来ると日本語や英語でよく話しかけたりしていた。また、Cちゃんは高校進学を考え始めるようになっていた。そのため放課後教室ではおしゃべりではなく数学の勉強を希望するようになった。フィリピンと日本では算数・数学のカリキュラムが異なり、日本のカリキュラムの方が進んでいる。したがって数学の学習ではしばしば小学校の算数の内容に戻る必要があったが、それでも粘り強く取り組んだ。数学の支援は主に筆者（ポーリン）とYさんが担当した。昨年度Cちゃんと一緒におしゃべりしてくれたEさんは、日系ブラジル人のAちゃんとHちゃんのサポートにまわり、Cちゃんの様子を傍で見守った。

夏休み直後K中学校の先生から、受験を控えているためCちゃんへの支援の回数を増やしてほしいとの要望があった。Cちゃんが高校への進学を希望していることを知っていた筆者（半原）は快諾し、放課後教室とは別に週に2回学校の時間割のなかに入る個別支援をK中学校の先生と相談の上計画した。個別支援には、放課後教室にかかわってくれているYさんと、K中学校ではない別の場所で外国にルーツを持つ子どもの支援にかかわってくれている学部3年生で日本人学生のNさんが担当してくれることになった。Cちゃんは、個別支援では苦手な数学と得意な英語の学習に取り組んだ。

秋頃、Cちゃんの遅刻や早退、欠席が目立つようになった。また、学校に来て放課後教室を休むことがしばしばあった。Cちゃんの母親の体調は回復せず、Cちゃんの精神科への通院もまだ続いているようだった。この時期、Cちゃんは放課後教室には来たり来なかったりであったが、個別支援を担当している学生からはCちゃんの力が伸びているとの報告を受けていた。特に英語の支援をしているNさんから、高校入試の英語の過去問題を解くスピードが上がり自信を深めているようだと言っていた。個別支援と放課後教室の両方にかかわってくれているYさんも、筆者ら放課後教室のメンバーに個別支援でのCちゃんの様子をよく報告してくれた。そのためCちゃんが放課後教室に来なくても過度な心配はせず、Cちゃんがいつか来てくれることを待った。この時期、来日したばかりのフィリピン人のAJちゃんが放課後教室に来るようになった。AJちゃんはCちゃんと同じ年であるが学年を一つ落とし、中学2年生としてこれから1年半K中学校に在籍する予定の生徒であった。

受験が目前に迫りつつある年明け、Cちゃんは面接の練習シートを持って放課後教室に現れた。Cちゃんは兄が進学した定時制高校への入学を希望していた。その高校には英語や数学の他に面接試験がある。Cちゃんが持ってきた練習シートは、面接試験で予想される質問項目が20ほど記されたものだった。Cちゃんは質問項目への模範解答を作成し、それを覚えようと何度も何度も音読をした。しかし何度目かの練習の際、「頑張っても覚えられない」、「自分は日本語が下手だ」と言って泣き出した。その様子を見たEさんが、模範解答ではなくCちゃんの言葉で伝えられる

よう質問に対する答えを一緒に書き直していつてくれた。Eさんは、Cちゃんが中学2年生の時おしゃべりをしてくれた学部学生である。EさんはCちゃんの得意なことをはじめ、Cちゃんの今までの歩み、例えば中学2年生の時日本人の友達と上手におしゃべりができるように日本語の練習を頑張ったこと、日本語が分からず悔しい思いや寂しい思い、不安な思いをたくさんしたこと、それらを乗り越えてここまで来たこと、そして今高校受験に立ち向かおうとしていることなどを一番よく知るメンバーである。EさんはCちゃんと再びおしゃべりしながら、中学生時代に頑張ったこと、この高校に入りたい理由、将来の夢などの質問項目を一つ一つゆっくり丁寧に、CちゃんがCちゃんの言葉で伝えられるよう言葉を紡ぎ出していつてくれた。

2-3. 自分の将来について展望を持つようになる（2016年3月～現在）

Cちゃんは無事高校に合格した。去年、兄のK君達は高校合格と同時に放課後教室に来なくなったが、Cちゃんは合格した後も卒業するまでの間放課後教室に顔を出した。そして、来日して間もないAJちゃん、中学2年生のKO君、中学1年生のAちゃんとHちゃんに「自分のようにならないよう今からよく勉強しておくように」とアドバイスをしたり、Eさんら支援メンバーとおしゃべりをしたり数学の勉強をしたりして過ごした。

高校に入学したCちゃんは、現在学業とファーストフード店でアルバイトを両立させながら頑張っている。体調を崩していた母親も元気になり、今は福井市内でフィリピン料理を出す小さな飲食店を営んでいる。母親との関係も良好で、Cちゃんは時間がある時は母親が経営する飲食店の手伝いもしているようだ。筆者（ポーリン）にはCちゃんから度々数学に関する質問の電話がかかってくる。高校でよく勉強して、将来フィリピンの専門学校で調理師の資格を取り、いつか母親の飲食店を支えるのが現在のCちゃんの夢だそうだ。そうしたCちゃんの現在の様子を、Cちゃんの母親がK中学校での放課後教室のことと結び合わせながら次のように語ってくれた。

C-chan has changed a lot since the program started. We used to fight a lot before. We had a lot of misunderstanding before when she first came to Japan. But now, she has matured so much. She is doing her best to balance school and her work. She even shared to me her plans of saving so that she can go back to the Philippines and enter a culinary school. She is now considering her future. She found friends in your group. Now, KO-kun is her bestfriend. He has a very good influence on her. I also realised that I was too strict with them before. Now, I learned how to talk to them better so we will not be fighting all the time.

（Cちゃんはプログラム [=放課後教室] に参加するようになってずいぶん変わりました。私達は以前よく喧嘩していました。Cちゃんが日本に来たばかりの時はよくお互いに誤解もしていました。Cちゃんは、今は大人になりました。学業と仕事のバランスを頑張ってとっています。いつかフィリピンに戻って専門学校に入りたいという夢を語ってくれるようになりました。自分の将来について考え始めているのです。彼女はあなた達のグループのなか [=放課後教室] で友達も見つけました。KOくんは彼女の親友であり、Cちゃんにとっても良い影響を

与えてくれています。以前、私は子ども達に対しとても厳しくあたっていました。今は子ども達とぶつかるよりも、どうやってより良いコミュニケーションをとるかを考えています。)

3. 考察一本支援の特徴

ここまでCちゃんの成長過程を跡づけてきた。1年半という期間の稜線を辿れば、一見成功事例のように見えるかもしれない。しかし、筆者らはCちゃんへの支援についてこれで良いのだろうかとかと常に自問自答を繰り返してきた。また、Cちゃんが卒業した後もこれで良かったのだろうかと思いつくことがしばしばであった。卒業後Cちゃんが放課後教室をどのように思っていたのか尋ねたところ、筆者らの予想に反し肯定的な感想がCちゃんから述べられた。

Ung una ndi ako nainis masaya nga eh kase may nakakausap ako tapos sama sama pa kami nila kuya tapos .. Gusto ko ung kahit makulit kami lalo ako ndi kayo nagagalit tumatawa lang kayo ganon ung ayaw ko lang dati ung may pe kami tapos dance un bigla andun ung teacher ndi ako nakapag pe kaya umiyak ako sobrang inis hahahaha .. Oo naman nakatulog tumaas grade ko sa math dati 2 naging 15 hahahaha ! Ung si erina ganda nya maging teacher ndi kibishi parang kaibigan lang ung turing nya sakin ganun tapos kay hambara sensei subrang bait talaga tapos sa lalake ano papasalamat ako sakanila kase pinag dasal nila na makapasa ako binigyan pako ng charm siguro kung walang kayo dun kung ndi kayo dumating ndi ako nakapasa sa exam kase kayo ung nag papalakas ng loob ko sabi nyo pa kaya ko to gambare ganun kaya un nakapasa ako .. Ung sa dalawang bulinggit meron ako message ! Miss ko na sila kaharutan lalo na ung maliit mag aral kamo silang mabuti pag 3 nensei na sila galingan nila lalo para makapuntasila sa gusto nilang koukou

(私は放課後の教室に行くのが好きでした。なぜなら他の生徒や支援メンバー達と話することができたからです。みんなは私の友達のようなでした。私のおかしな態度もみんなは怒らずに笑ってくれました。一回だけ大好きな体育のダンスの授業が個別支援の時間に振り替えになった時は泣きましたが…(笑)。でも支援は私にとってとても役に立つものでした。数学の点数も2点から15点にあがりました(笑)。Eさんは優しく友達のように接してくれました。Yさんは高校受験の前に合格祈願のお守りをくれました。みんなのおかげで高校に合格できました。AちゃんとHちゃんはとても可愛く、今でも彼女達にとっても会いたいです。二人には高校に行けるよう頑張ってほしいです。繰り返しになりますが、このチームがいなければ今の私はいなかったと思います。)

Cちゃんの肯定的な受けとめから、本支援がCちゃんの成長の一助となったものと位置づけ、以下、本支援の特徴を考察したい。

3-1. 異なる学年の子ども達が共に学ぶ

本支援教室には、様々な言語文化背景を持った中学1年生から3年生までの生徒達がいる。言

語文化背景の多様さも注目に値するが、ここでは「異なる学年の子ども達がいること」に着目したい。中学1年生から3年生までの子ども達がいることは筆者らが予め企図したものではなく、K中学校の先生の声かけによるものである。したがって偶発的にできた状況なのかもしれないが、そのことはCちゃんの成長にとって非常に重要な意味を持っていた。

Cちゃんが本支援教室に来るようになった一年目、Cちゃんは中学2年生だった。一番年下でみんなの妹的存在であった。当時Cちゃんは高校に進学しないとっており、一つ年上のT君と兄のK君が高校受験の面接準備に取り組む様子を見てからかっていた。しかし今思えば、おそらくCちゃんはその時一年先に行く二人が進路選択をし、自分で決めたこと、すなわち高校受験に向け努力する姿に一年後の自分の姿をぼんやり重ねていたのであろう。そして二人が高校に合格したのを見て、自分にも働くこと以外の選択肢があり、努力すれば高校に行けるかもしれないと希望を持ったのだと思う。

中学3年生になってからは、上述したようにCちゃんは教科の学習に取り組み始める。時を同じくして放課後教室にCちゃんより年下の生徒達が新たに加わる。中学2年生でフィリピン出身のKO君、中学1年生で日系ブラジル人のAちゃんとHちゃん、そして少し遅れてフィリピン出身で中学2年生のAJちゃんである。Cちゃんは放課後教室に来ると年下の彼らを気にかけて、よく声をかけてくれた。そのおかげか4人の子ども達も変化していった。一例を挙げると、当初AちゃんとHちゃんは部活や塾を理由に放課後教室に来ることに消極的であった。しかし、次第に放課後教室を優先するようになり、今では誰よりも積極的に教室にやってくる。また、AJちゃんは放課後教室に来ても机にうつぶせたり、具合が悪いと言ってすぐに帰ったりしていた。しかし、Cちゃんとフィリピン語で話すことで気持ちがほぐれていったのか、次第に放課後教室に長くいるようになり、漢字や英語の学習に取り組むようになった。

2016年10月現在、放課後教室には中学3年生になったKO君、AJちゃん、中学2年生になったAちゃんとHちゃん、そしてこの秋転入してきたばかりの中学1年生でフィリピン出身のNちゃんがいる。AJちゃんがNちゃんにフィリピン語で声をかけ、Aちゃんが英語と日本語とジェスチャーを駆使しながらNちゃんに話しかけている。それはまるでCちゃんが自分達にしてくれたことを年下のNちゃんに行っているようでもある。

Cちゃんがインタビューのなかで、「このチームがいなければ今の自分はいなかったと思う」と形容した「このチーム」は、中学1年生から3年生までの子ども達が学び合う構造を持ったものであった。先輩と後輩はお互いがいて、初めて存在するものである。後輩でいられるのは先輩がいるからであり、先輩になれるのは後輩がいるからである。Cちゃんの成長を見ても、また現在のAJちゃんやAちゃんを見ても、後輩として先輩を見ていた経験、そして先輩になり後輩を持つという経験が彼女達を成長させているのだと思う。

3-2. あらゆる世代や専門を持つメンバーが協働で子どもとかわる

支援者に目を向けると、支援メンバーも日本人と外国人で、学部学生・大学院生・教員といったあらゆる世代の者で構成され、また専攻や専門も多様である。生徒達は毎回自分が勉強したい

ものを自由に持ってくる。数学、理科、英語、時には書道や音楽などが持ち込まれる。筆者ら支援メンバーは「自分はこの生徒」といった具合に担当を決めていない。みんなで子どもを見ることを大事にしている。例えばCちゃんの場合、上述したように教室に来たばかりの中学2年生の頃は学部学生のEさんがCちゃんと主に日本語でおしゃべりをした。中学3年生になってからは数学教師の筆者（ポーリン）もしくは工学研究科博士後期課程のYさんが主に数学の学習をサポートし、高校受験のための面接練習時には再びEさんがCちゃんを支えた。

またメンバーは英語が得意だからといって英語を担当するのではなく、数学が苦手だからといって数学を担当しないのではない。それは子ども達に「教える」のではなく、子ども達と共に学ぶこと、共に考えることを大事にしているからである。様々な専攻や専門を持つメンバーがいるため、ある教科に子どもと取り組み壁にぶつかっても、近くにいるメンバーがアドバイスをしたり一緒に考えたりすることができる。そのため、支援者は協働という安心感のなかで子ども達とかわかることができる。Cちゃんの言う「このチーム」は、子どもと支援者が学び合い、また支援者同士が支え合う仕組みを持っているものだと言える。

3-3. 学校のリズムに歩調を合わせる

本支援は、K中学校の先生方との連携がなければ成り立たない。K中学校で支援を開始することができたのも、現在までに支援が継続できているのもK中学校の先生方の理解と協力のおかげである。学校にとって、外部と連携し何かを行うのはかなりの負担と労力がかかるものだと想像する。実際、本支援の連絡調整をしてくださっているK中学校の先生と筆者（半原）の間では頻繁に細かい調整が行われる。しかし、K中学校では本支援が始まった当初から筆者（半原）と連絡調整を行う担当の先生を一人以上決めてくださり、またその担当の先生は筆者との連絡を厭うことがない。子ども達のことを親身に考え、積極的に連絡・情報交換をしてくださる。そればかりか、どんなに忙しくても放課後教室に必ず顔を出してくれる。上述したように担任や学年主任、管理職の先生が顔を出してくださる時もある。本支援は週に1回学校の相談室や会議室を「間借り」して行うものではなく、K中学校のなかに大切に位置づけられていると感じる。K中学校と共にこの支援に取り組むなかで、筆者らは次第に学校のリズムに歩調を合わせ、支援の調整を行うようになっていった。例えば、学校には年度始めや年度終わりといった節目や、夏休みや冬休み、各種行事などがある。大学側ではなく学校側、つまり支援者の方ではなく子ども達の方のリズムに歩調を合わせ取り組んでいることは、現在子ども達が数多く継続して来てくれていることにつながっているように思う。

4. 結びに代えて—今後の展望

以上、筆者らが取り組んでいるK中学校での支援の展開をCちゃんの成長を軸にそのプロセスを記述し、本支援が持つ特徴を考察した。得られた知見から今後どのようにこの支援を発展させていくことができるだろうか。まず、中学1年生から3年生までの子ども達がいること、そしてそのほとんどが継続して来てくれていることから、より学習の充実が図れると考えている。それ

は異学年の子ども達の学び合いに挑戦している学校や、中学3年間の長期にわたるプロジェクト学習を展開している学校の取り組み事例（福井大学教育地域科学部附属中学校2011、福井市至民中学校2015等）から学ぶことができるだろう。さらには、子ども達と支援者をあわせ幅広い世代が集うこの教室を、ただそうした世代が集まっているだけの教室ではなく、「コミュニティ」として位置づけ、より積極的なコミュニティのデザインを行いたいと思っている。そのためには多様な世代の様々なレベルの参加、例えば大学生だけではなく高校生や地域の方の参加等も今後検討したい。現在、高校生になったCちゃんが今後支援者としてこの放課後教室にかかわることに興味を示してくれている。世代がつながり世代が継承されるコミュニティをどのように耕していけるか、今後は楽しみである。

冒頭に述べたように、多言語多文化共生社会はすでにそこに「ある」ものではなく、我々の地道な日々の試行錯誤とその事例の検討によってその可能性が拓かれていくものだと考える。今回この実践報告を書くことにより見出した気づきや展望を大事に、また明日からの実践を仲間と共に取り組んでいきたい。

注

- i 日本国籍を持つ子どももいることから、ここでは「外国にルーツを持つ子ども」と表現する。
- ii 「福井市多文化共生推進プラン（改訂版）」より。ここで示されているのは「外国籍の児童・生徒」の人数である。
<<http://www.city.fukui.lg.jp/kurasi/mati/international/tabunkaplan2.html>>（2016年10月1日参照）
- iii Cちゃんへのインタビューおよび母親へのインタビューは、いずれも2016年8月に行った。
- iv 本写真の掲載についてはK中学校の許可を得ている。

引用・参考文献

- 福井市至民中学校・福井大学教職大学院（2015）『実践記録2014 学びと生活の向上：規範・学力・有用感の向上を目指して』
- 福井大学教育地域科学部附属中学校研究会（2011）『学びを拓く《探求するコミュニティ》』第1巻～第6巻 エクシート
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課（2011）『外国人児童生徒受入れの手引き』
- 柳沢昌一（2015）「学校における〈実践と省察のコミュニティ〉を支える省察的機構としての教職大学院」『教師教育研究』8号、pp.13-24 福井大学大学院教育学研究科
- D.A.Schön(1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, Basic Books（柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か』鳳書房、2007）
- Etienne Wenger, Richard McDermott & William M. Snyder(2002) *Cultivating Communities of Practice*, Harvard Business School Press（野村恭彦監修『コミュニティ・オブ・プラクティスーナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、2002）

付記

本研究は、以下の二つの助成を受けた研究成果報告の一部である。

- ・平成27～29年度科学研究費補助金研究基盤（C）「日本人住民と外国人住民の共生コミュニティ形成を支える探究型教育連携モデルの構築」（研究課題番号：15K02637 研究代表者：半原芳子）
- ・平成28年度福井大学地域貢献事業支援金「外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習」（事業責任者：半原芳子）

The Reflection on the Support Community Established with Minority Students:
Towards the Cultivation of a Symbiotic Community

Yoshiko Hanbara, Pauline Mangulabnan

This is a descriptive account on the established symbiotic community to provide transitional, academic and affective support for students with foreign roots in a junior high school in Fukui. More specifically, this report tackles the researchers' observations and learning from the analysis of C-chan's growth and development during the time she was with the community. Moreover, these findings seem to suggest a workable framework for cultivating a support community for minority students.

Keywords : Reflection, Records of Practice, Community Design